

テーマ：ウィーン古典派解釈における考察 ～ドイツ、およびオーストリアの伝統を考慮して～

講 師：ヤン・イラチェック・フォン・アルニン 通 訳：西川麻里子

要 旨

「お父さん、ここはまさにピアノの国です！」

これはモーツァルトが1781年のウィーン滞在の際に父レオポルドに当てた手紙の一節です。ウィーンには今日まで脈々と続くピアノの伝統が息づいています。この伝統はここで生きた作曲家、演奏家、教育者達により受け継がれ、且つ常に発展し続けているのです。当時モーツァルトもこの地でピアノレッスンをし、ベートーヴェンは生まれ故郷のボンからウィーンに居を変えたのは、この地でピアノのレッスンを受けようと思ったことが大きな理由の1つでした。ベートーヴェンの最初のピアノソナタは、彼の師であったハイドンに捧げられていますし、ベートーヴェン自身もツェルニーを教えました。ツェルニーの教育者としての貢献と、彼が残した1000曲を超えるピアノ練習曲は「ピアノの国、ウィーン」の名声を益々広める事となりました。ツェルニーの弟子にはタールベルク、レシェティツキー、そしてフランツ・リストが名を連ねます。この講座では、特にこの時代のピアノ教育の発展について取り上げたいと思っております。

又、私は数年前から創設者ウィルヘルム・ケンプの精神を受け継いで、毎夏ポジタノで開催されているベートーヴェンのマスターコースで教鞭を取っています。これは、若い世代のピアニスト達に、ドイツにおけるベートーヴェン作品の伝統的な解釈を伝えていくのが目的ですが、ウィーンとドイツ、この2つの伝統の共通性と違いについても述べたいと思っております。

私は常に、学生には意識的にテンポとリズムの問題について取り組ませています。これはツェルニーの当時のレッスンの様子から、正しいテンポ設定こそがベートーヴェン作品における最も本質的な要素であると考えていたことが見て取れるからです。例えばウィナーワルツの「軽やかさ」は、リズムの柔軟性(2拍目が僅か早めに奏され、3拍目が若干遅れて感じられる)がその大きな特徴です。しかしワルツ自体の基本的なテンポはしっかり安定しています。これはどんな踊りにも共通の特徴で、そうでないとパートナー同士のステップが揃わず踊れなくなってしまいます。この舞踏特有の躍動感と拍感は、特にベートーヴェン・シューベルトの作品の理解には必要不可欠なのです。この習得には練習時のメトロノームの活用が効果的です。そしてリズム・音質が作曲家の意図するものに適しているかどうかを念頭に置いて、常に自分の音を良く聴く、という事がピアノを学ぶ上で最重要だと考えています。ピアノの学生は先ずは指揮者の様に楽譜を細かく丁寧に読み込み、作品の理解を深めねばなりません。作曲当時の時代背景や作曲家の生活環境も知った上で、例えば古典派の作品ならば、当時の典型的な形式に則った部分と、作曲家自身の特徴的なアイデア(ベートーヴェンのソナタ op.31-1 の1楽章の冒頭は突如右手の唯一のG音で始まります。これは当時の同時代の作曲家たちにどんなショックを与えたでしょう!)を考察し、作曲家の考えの軌跡を追うという事が、作品理解に直結する道なのではないでしょうか。

講座ではこのような解釈の問題についても細かくお話ししたいと思っております。

ヤン・イラチェック・フォン・アルニン 2019年1月ウィーンにて
(訳：西川麻里子)